

藤原実方雑考

北村杏子

平安中期の歌人藤原実方については、近年その研究がとみに進んできている。そして謎につつまれた実方の伝記も少しずつ明らかになりつつある。私は今ここで実方の伝記の全般にふれるのではないが、その二、三の問題点について調査した結果を述べ、あわせて実方の歌風の一面について考えたことを述べたい。

(一)

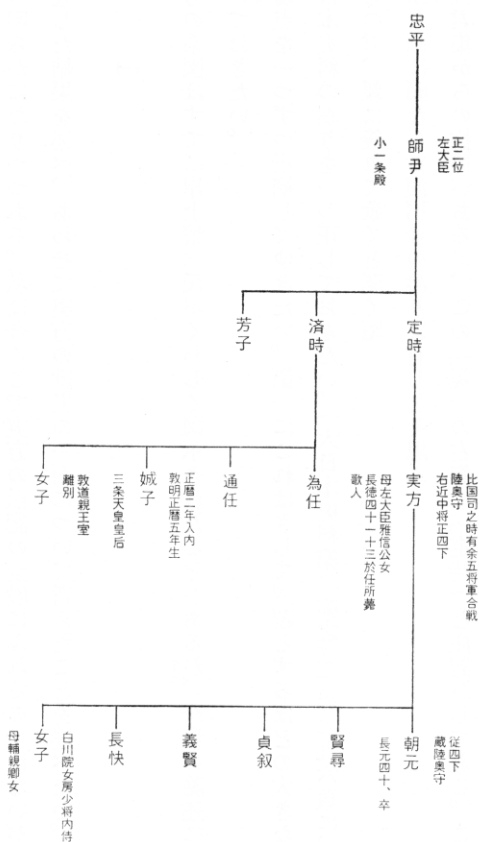
まず実方の系図はすでに岸上慎二氏がくわしく図示されたことがあるが、^①今私の論述に必要な部分だけでもう一度ここで書いておきたい。

さて問題点を一つずつ指摘してゆきたい。第一にこれはさして問題とするほどの大きな問題ではないかもしれないが、大日本史料の誤りを一つ正しておきたい。「大日本史料第二編之三」の二九六頁に、

実方の君、親に後れて歎くと聞く頃

底はふち淵は瀬ならぬ涙川袖の渡りは有しと思ふ

という小大君集からの抜粋があるが、この「親」の右側に「定時」と注記がしてある。この小大君集は「私家集大成・中古Ⅰ」所収の「小大君集Ⅰ」によるものであるが、同じ「私家集大成」の中の「小大君集Ⅳ」によれば、こ



の本文は、

春みやにて、こゆみいさせたまふに、よるになりて、ひともしにやりたるか、さねかたの中將、みちのくに
になりてのことなり、

まつほとそひさしかりけるゆく末のまたとほければたけくまのまつ

おなしさねかたのきみ、おやにおくれてなけくと聞て

そこはふちこはせになるぬなみた河そてのわたりはあらしと思

となっていて、「そこはふち」の歌が詠まれたのは実方が陸奥守になって以後のことと思われる。このことから「親」は「定時」ではなく、定時死後実方の養父となっていた「済時」のことであろう。事実済時は実方が陸奥守になった年の四月になくなってゐるのである。

次に実方の女に白川院女房少将内侍、母輔親卿女という注記を持つ女性がいる。しかし母が輔親卿女であり、白川院女房というところに疑問がさしはさまれる。なぜならば輔親は大中臣輔親のことであろうと思われるが、この輔親は生年が天曆八年（九五四年）であり、実方の生年は岸上慎二氏の御説によれば、天徳四年（九六〇年）である。ほぼ同年といつてよい。この点から実方が輔親卿女と結婚したとすれば、実方の最晩年のことと思われ、その可能性がないわけではないが、輔親集にも伊勢大輔集にも何ら実方に關する記事のないことから、実方が輔親卿女と結婚した可能性は少ないと思わざるをえない。また白川院女房とあるこの白川院をもし白河天皇とするなら、白河天皇が即位したのは延久四年（一〇七二年）のことであり、実方の卒した長徳四年（九九八年）に生まれた女であるとしても、いささか女房として年をとりすぎている観がある。このような観点からこの実方女の注記にはいささかの疑念がわいてくるのである。

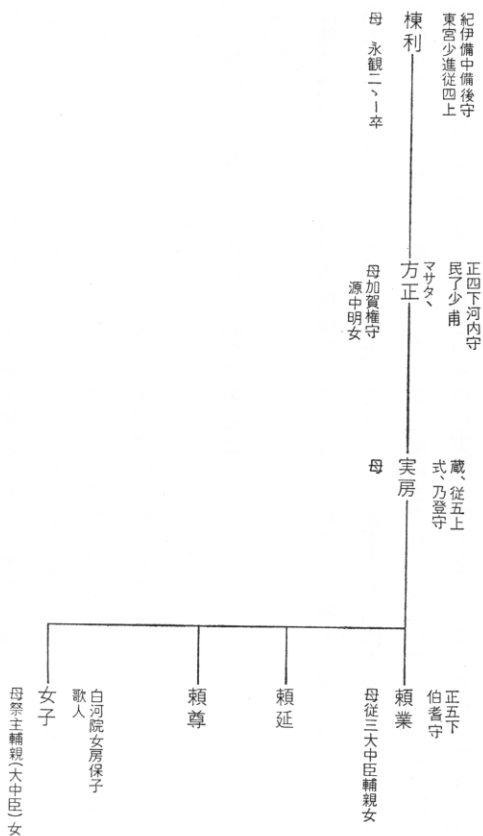
ところで、勅撰作者部類で少将内侍を調べてみると、

少将内侍 白川院女房
能登守実房女

とあり、歌は後拾遺集雜二に二首、金葉集雜上に一首とられている歌人女房がいることがわかる。この能登守実房女を国史大系本尊卑分脉第二篇によつて調査してみると、藤原南家真作の流に左記のような記述がある。

私にはこの保子という実房女の注記が実方女の注記にまぎれこんだのではないかと思われるのである。なぜこのような混同が起つたのかといへば、実方というのが実房と字がよく似ているからであらう。そして少将内侍の歌を調べてみると前記勅撰作者部類にあったように次の三首がみられる。

後拾遺集(番号は国歌大観の番号)



資良の朝臣藏人にて侍りける時園韓神のまつりの内侍にもよほすとてみそぎすれど此世の神はしるしなければ園韓神にいのらむといひて侍ける返事によめる

少将内侍

946 近きだにきかぬ禊を何かそのから神までは遠くいのらむ

わづらふといひて久しう音せぬ男のほかにはありくと聞て遣はしける

少将内侍

966 根ぬなはの苦しき程の絶間かとたゆるをしらで思ひけるかな

後冷泉院の御時近江国より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にもみさせ給はざりければ女房たちゆかしがり申しければ、おのおの歌よみて奉れ、さてよくよみたらむ人にみせむと仰せ事ありければつかうまつれる

少将内侍

602 たぐひなくよに面白き鳥なれば床しからずと誰か思はむ

そして後拾遺集九四六番の詞書にある資良朝臣が藏人であつた時期を調べると、後朱雀朝、後冷泉朝に藏人であつた藤原資良^③のことと思われ、金葉集の歌にあるように後冷泉院の御時に少将内侍が歌を奉つたのとも一致し、母輔親卿女、白川院女房少将内侍というのは、この後冷泉朝から白河朝にかけて官仕えをした女房歌人保子をいうのであらうと思われる。

しかし実方に女子がいなかったわけではない。後拾遺集雜二の中の九一五番の歌に、

実方の朝臣の娘に文通はしけるを藏人行資にあひぬと聞きてこの女のつばねにうかがひて見あらはしてよみ

待りける

左兵衛督公信

朝な／＼おきつつ見れば白菊の霜にぞ痛く移ろひにける

というのがあり、この詞書中の藏人行資は一条朝の六位藏人であつたということが指摘されており、長徳元年七月二日から六位藏人となっている。この行資と結婚したのはまさしく実方の娘であらう。一方左兵衛督公信とは藤原公信のことと思われ、藤原公信は左兵衛督になつたという記録はみられないが、長徳四年十月二三日から長保元年壬三月少納言に任ずるまで右兵衛佐であつたことがわかつてゐる。^⑤

また実方の女には、菅原在良の母であつた女性がいることが尊卑分脉には記されている。在良は、文章博士、大内記、御書所の別当、式部大冉等を歴任し保安二年（一一二一年）十月二三日八十一才で没している。新古今集、

新勅撰集の作者でもある。保安二年に八十一才とすれば、生年は一〇四〇年ごろであり、その母である実方の女は、実方の最晩年の女であろう。

さて今度は子女のことをはなれて実方自身について多少面白く思われる事柄を記してみよう。実方と兼家の男である道綱はかなり親しい友人であったことが、実方の家集などからわかるが、蜻蛉日記巻末歌集に次のような記述がある。

実方の兵衛佐にあはすべしと聞きたまひて、少将にておはしけるほどのことなるべし

柏木の森だにしげく聞くものをなどか三笠の山のかひなき

返し

柏木も三笠の山も夏なればしげれどあやな人の知らなく

返りごとするを、親はらから制すと聞きてまろこすげにさして

うちそばみ君ひとり見よまろこすげまろは人すげなしといふなり

一方、大斎院前の御集には次のような記述がある。

さねかたの兵丞のすけのけさうするみつなか、むすめをみちつなせうしやうえつときくに兵丞のすけにあは

せつとききしものこそ、うさのつかひもかひなかりけりなといふことともをききて、あひなきことなれと、

やまとのめのと

いのれともすくせの神はゆるすにはうさの山へもかひなかりけり

なにせんにおもひなりぬとたのみけむころつくしのうさにそありける

いのれともうさのやしろのかひなきに心つくしにおもひたくな

これらから実方と道綱の間に女性をめぐって恋の確執があったことが推測される。実方が兵衛佐であったのは天元

元年（九七八年）二月二日から永観二年（九八四年）二月一日までであり、一方道綱が少将であったのは天元六年（九八三年）二月二日から寛和二年（九八六年）十月一日まで左近衛少将であった。蜻蛉日記卷末歌集の記事では実方に旗色がよく、大斎院前の御集では道綱の少将が恋の勝利者となっている。なお日本紀略によれば「永観元年十一月二十四日乙亥 奉遣宇佐使右兵衛佐従五位上藤原朝臣実方、即叙一階」とあって、大斎院前の御集の記事はそのあとということになるのである。

(一)

次に実方の歌の特色の一面について考えてみたい。実方の歌は、百人一首にとられた「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆる思ひを」という歌がよく知られている。これは非常に技巧的な歌で、そのあまりの技巧に、それを肯定するか否かで大きくこの歌の評価がわかれるであろう。為家は詠歌一体の中で、この歌について「これらはあしからねどもすずろにこのすぢをこのみよむ事あるべからず」と述べている。

さてこの百人一首にとられた歌はこのように技巧的なものであるが、実方の歌一般はどのようなものであろうか。実方の歌にとってこの技巧がどのように扱われているかといった観点から考えてみたいと思う。

ところで管見にいる限り実方の歌風について述べた論は少ない。古来風体抄に

東宮にさぶらひける絵に、くらはし山にほととぎすなきたるところをよめる

藤原実方朝臣

さ月やみくらはし山のほととぎすおぼつかなくもなきわたるかな

このうたまことにありがたくよめり、よりていまのよの人、歌の本たいとするなり。されどあまりに秀句にまっはれり。これはいみじけれどひとへにまなばん事はいかゞ。

とあって実方のこの歌を高く評価しながらも、そのあまりの秀句的表現にそれをまねぶことへの警戒の言を放って

いる。この実方の「さ月やみくらはし山の……」の一首はその代表歌の一つとされるものでほととぎすをよんだ歌の古今の名歌の中の一首に擬されていたことが袋草紙上巻に出ている。この一首もきわめて技巧的な歌である。これら以外に実方の歌風について述べたものでは、至文堂刊の「増補新版日本文学史・中古」の三四五頁から三四六頁にかけて、実方集に関する記述があるが、そこにはこの実方の家集の特色として以下の三点を挙げておられる。

- (1) 詞書に物語的な記事や風俗的な記事が多い。
- (2) 類従本には連歌が一三首もあつて、中には思いきった俳諧の歌がある。
- (3) 歌の調子が軽快で、くつたぐがない。

この三点をあげてそれぞれ例歌をあげておられるのであるが、前述した実方歌の技巧という点から考えて(2)の連歌に注目したのである。

実方の連歌については早く島津忠夫氏が、「連歌俳諧研究」二十一号誌上に「短連歌初期の諸相」という御論考を登載され、短連歌史上における実方の重要性を主張しておられるが、私も同感である。実方は短連歌初期における短連歌作者として、その位置をもっと認められてよいように思われる。そしてその連歌が先に「増補新版日本文学史・中古」誌上にも述べられているように、俳諧性を帯びたものが多いという点が注目される。この「日本文学史」誌上にはその例として

足のかみ膝よりしものさゆなるは (実方)

こしのわたりに雪やふるらん (左京の君)

が挙げられているが、これは「菟玖波集」の俳諧の部にも

奥山に船漕ぐ音は聞ゆ也

なれる木のみやうみ渡るらむ

紀貫之

とならんで

あやしくも膝より上のひゆるかな

こしのわたりに雪やふるらむ

実方朝臣

として載せられている。

さてここにいわれる俳諧ないしは俳諧とはどのようなことを指すのであろうか。またどのような意味を持っているのであろうか。俳諧はいわゆる滑稽ということがいわれるが、これは如何であらうか。

古今集巻第一九の雑体の中に俳諧歌五八首が載せられていることはよく知られている。そして私は以前これら五八首の歌を検討し、その俳諧性を考えたことがあるが、^⑩その時の結論の一つとして、俳諧歌には掛詞が多いという一項を挙げた。つまり一般の歌よりも技巧的であるとの結論に至ったわけである。ここに俳諧性が濃厚だといわれる短連歌を多く詠んでいる実方の歌が技巧的であるといわれるのもっともであると思われる、実方の歌の特色の一つに俳諧性を認めることが可能であるように思われるのである。

三

ここで実方集にみられる短連歌について検討を加えてみよう。一首一首見てゆきたいと思うが、テキストには歌数のもっとも多い実方中将集(書陵部蔵・一五〇・五六〇)、「私家集大成・中古Ⅰ」所収「実方Ⅱ」に使用する。また頭につけた番号はテキストによる。

うちにて、水にうきたるはしに、うたゝねにねたるに、よふかき月にこゑおかしくて、信方中将、

五七 a うちかはのなみのまくらにゆめさめて

といへは

五七b よるはしひめやいもねさるらむ

この連歌では、実方の「よる」という語に、「波の寄る」と「夜」がかけられている。

新さうゑのよ、あかひものみたれたると、信方中将のうれうれは

五八a いかなるひものよはにとくらむ

信方中将

五八b あしひきのやまゐの水はさえながら

実方の句には「ひも」の部分に「紐」と「氷も」がかけられている。また「とく」に「紐が解ける」意と「氷が溶ける」意とをかけている。

ゆきふれるあした、こき殿のきたおもてに、左京の大夫道なかのきみ

五九a あしのかみひさよりしものさゆるかな

とあれは

五九b こしのわたりにゆきやふるらむ

実方の付句には「こし」に「腰」と「越」がかけられている。

ゆみのけちに、またらまくに、ゆきのふりたりける、入道中納言

六〇a まつかたのまたらまくなるゆきみれは

とあるに

六〇b しりゑのやまそおもひやらるゝ

殿上にて、ほとときすまつころ

六一a かきくもりなとかおとせぬほとゝきす

ためすけきゝて

六一b かまくらやまにみちやまとへる

この二つの短連歌は六〇の方が意味が未詳であるため掛詞があるか否かが不明で、また六一の方は特に掛詞はみあたらないようである。「かまくらやま」も吉田東伍氏著「大日本地名辞書」で見ると、相模と岩代にあるが、特にほととぎすとの関係があるとは思われない。「かまくらやま」とは咄嗟に言われたものであろう。

ためすけ、かうふりうへきまへのとし、八月つきあかき夜、ものかたりして

六二a かそふれはいまいつゝきになりけり

ためすけ

六二b むつきにならはとふ人もあらし

これは「ためすけ」の付句の方の「むつき」に「六ヶ月」の意と「睦月」がかけられているのであろう。

みかは水のつらに、あるくら人のなかむるを、ものおもひかほにてもるかなといへは、くら人

六三a こひせまほしきかけや見ゆらむ

とあるに

六三b やつはしにあらぬみかはのをちにゐて

この実方の付句の「みかは」に「御溝水」と地名の「三河」がかけられている。

六月つこもり、御はらへの日、あるやかきのまへをわたれば

六四a さをしかのみゝふりたてゝ神もきけ

といふ人あり

六四b をむとをもかせるつみはあらしな

これは前句の方に「さをしかの耳」と「耳ふりたてて」とがかけられているということ、また実方の付句の方にある「をむ」が意味が未詳なので掛詞の在否が不明である。

五節所にて、まかてなむといひありけは、六条の少納言

六五 a くものうへを月よりさきにいてつるは

とあれは

六五 b ふしみのさとに人やまつとて

これは実方の付句の方の「ふしみ」に「伏す」という意と地名の「伏見」がかけられている。

六六 a 小一条とのゝ人く、なそくかたりに、かたすまけすのはなのうへのつゆ、
といひけるに

六六 b すまひくさはする人のなけれはや

これは「すまひくさ」という植物名と「相撲」がかけられている。

うちわたりの女房、あふきをとりてかへさゝりけれは

六七 a たかためにをしきあふきのつまならん

をんな

六七 b とれかしとらのふせるのへかは

これは「つま」に「妻」とものの端という意味の「端」がかけられているのであろう。

八月はかり、月あかき夜、花山院ひか歌よまむとおほせられて

六八 a 秋のよにやまほとゝきすなかませは

とおほせらるゝに

六八b かきのね月やはなと見えまし

これには特に掛詞といったものは見あたらないが、「ませば」「まし」という反実仮想を呼応させ、道理の通らぬことに道理をつけているのは実方の技巧におうところが多い。

三条とのゝせ行のひ、ゝつとものおほくみゆれは、ためすけ

六九a かのひつはなにそのひつそおほつかな

といへは

六九b かたひのまへのほかひなりけり

これにも特に掛詞はみあたらない。

以上が私がテキストとした実方中将集中に短連歌がまとまって載せられている部分であるが、この他にも次のような短連歌がこの実方中将集にはみられる。

くにへくたるとて、まかり申しに、女院にまいりたるに、ものかつくるまゝに、侍従の内侍

一八五a みちのくにころものせきはたちぬれと

といひもはてぬに

一八五b またあふさかはたのもしきかな

これでは侍従の内侍の句の方に「衣の関」と「衣」、「立」ちと「裁ち」が掛詞となっているが、実方はそれに対して即座にした付句の中に「逢ふ」と「逢ふ坂の関」をよみこでんいる。

あるところにまいりて、みすのうちにわかき人／＼、ものいふをきゝて

一八六a すのうちに／＼めくひなのこゑすなり

といへと、いらふる人もなければ

一八六 b かへすほとこそひさしかりけれ

これは歌いかけても咄嗟に答えをする女房がいなかったでの、実方自身が付句をよんでいるが、付句の方の「かへす」は「返す」という意と卵を孵化する意の「かへす」をいいかけている。また

八月一日、花山院の、御ゆみたまはりてのちに、くたるへき日の、ひければ、まことに、いつはかりとおほせられて院のおほせられし

三三七 a いへはありいはねはくるしわかれちを

とあれは

三三七 b そのほとゝたにいかてきこえし

という短連歌もある。これには掛詞はない。

以上実方中将集にみられる短連歌を一首ずつ検討してきたわけであるが、そのほとんどに掛詞が含まれている事実を認めることができる。そして掛詞のあることが俳諧歌の一つの特色とすれば、これらの短連歌も俳諧の連歌といふことができる。そして実方の歌の特色の一つに俳諧性を見い出すことが不可能ではないといえよう。このことを更に確実にする証拠として、後拾遺集の俳諧歌に実方の歌が二首もとられていることがあげられる。すなわち

題しらず

1203 まだちらぬ花もやあると尋ね見むあなかましばし風にしらすな

三条太政大臣の許に侍りける人の娘を忍びて語らひ侍りけり。女の親腹だちて娘をいと浅ましく罪しけるなどいひ侍りけるに三月三日かの北の方三夜のもちひくへとて出しけるによめる

1205 三日の夜のもちひはくはじ煩しきけばよどのには、こつむなり

という二首である。一二〇三の方は「あなかま」という俗語的な言葉が俳諧性を持つとされたのであろうが、一二

○五の方は「よどの」に「淀野」と「夜殿」、「はここ」に「母子」と「母子草」、「つむ」に「摘む」と「抓む」がかけられているのである。

四

さて実方の歌の特色の一つとしてその即興性をあげることができるとはあるまいか。短連歌で咄嗟に歌いかけたり、答えたりし、しかも多くの場合その中に掛詞を入れているところを見ると、実方が即興的に歌をよむことに長じていたと考えることができる。殊に先に記した一八六の a b の如きは、実方が歌いかけたのに対して急には女房達が答えられないのを見て、実方が答まで付けている。このことは袋草紙に

帥大納言云、女房歌詠懸時不_レ聞之由ヲ一兩度可_三不審。女房又云、如_レ此之間、廻_二風情_一猶不_レ成又問。女房ハユカミテイハズ。其間猶不_レ成バ別事ニ候ケリトテ可_レ逃。是究竟の秘説也ト云々

とあり、また鴨長明の無名抄にも、「女ノ歌ヨミカケタル故実」として
勝命語云、シカルベキ所ナドニテ無心ナル女房ナドノ、歌ヨミカケタル、術ナキ事オホカリ。ソレニハ故実ノアルナリケリ。マツエキカヌヨシニソラオボメキシテ、タビ／＼トフ。サレバ後ニハ、デシラヒテサダカニモイハズ。コレヲアツカフ程ニ返シ思エタレバイヒツ。ヨミウベクモアラネバヤガテオボメキテヤミヌル、ヒトツノ事也。(下略)

などあって、王朝の男性は女房たちからの歌による問いかけに對して返答に苦心したことがわかるが、実方はそのような苦勞はなかったであろうことをしのばせる。この即興性に富んでいるということが、前述の日本文学史に於て指摘された実方の歌風の一つの特色である「歌の調子が輕快で、くつたぐがない」ということと通ずるように思われる。そしてこのような実方の歌の特色は歌合にはむいていなかったものではあるまいか。事実、萩谷朴氏著の

「平安朝歌合大成」でみるかぎり、実方は歌合にはただの一度しか出席していない。その一度とは、花山天皇が催された「寛和二年六月十日内裏歌合」である。この歌合において実方は「桜」「月」「紅葉」「時雨」「霜」の題で出詠しているが、勝負は一勝・二負・二持であり、あまり成績がよいとはいえない。このようなところからも実方が即興的な歌にひいて、歌合のような重厚な歌にはむいていなかったということが想像される。

(五)

小大君集（書陵部藏・五〇一・二九）「私家集大成・中古Ⅰ」所収「小大君Ⅰ」の八〇番の歌は次のようである。

さねかたの中將、人のかりやらんとて、ためたふの君にかくいはんはいかゝといひける歌

八〇　いかてかはおもひありともしらすへきむろのやしまのけふりならては

おかしなといひてためたふの君、わかけさうする人のかりやりてけり、女のきゝてわらふほとに、まへをわたりければ、おんな

八一 a　このころはむろのやしまもぬすまれて

といひければ

八一 b　えこそはいはねおもひなからに

「ためたふの君」とは、実方の養父であった清時の子の「為任」のことであろうが、この「いかてかは」の一首は詞花集には、「題しらず、藤原実方朝臣」の詞書のもとに載せられている。また実方中将集には

人に、はしめて

九〇　いかてかはおもひありとはしらすへきむろのやしまのけふりならては

このうたを、右少弁ためたうのととりて、ようたりければ

九一 このころはむろのやしまでもぬすまれておもひありともえこそしらせね

となつてゐる。このことからわかるように実方の歌は前述したように即興的であるので、歌われた状況がいろいろに伝えられるのである。小大君集にはこの他にも

御扇のぬひ物したるをもたせ給ふて、これ見よとおほせられてたまはせたるをみれば、ほとゝきすのうのはなくひていくかたあり、たゝにやはとて

七六 かきねいつるたよりにくへるうのはなをおしむところもたてぬなるへし

これをさねかたのあそんに給はせたれば

七七 ほとゝきすなくにしちらはうのはなのかきねなからにきくへかりける

また

春宮にて、ひんかしに、たなはたのあしたに、たちはきのをさのありしかたにひきたるいと、くものすをひきければ、ゆきよりしかけ／＼となんをとりたてるとおほせられしかは

八六 さゝかにのもろてにいそくたなはたのくものころもはかせやたつらん

とありしを、さねかたのきみに人のかたり給めりしかは、たちなから

八七 ひこほしのくへきよひとやさゝかにのくものふるまひしるく見ゆらん

などと実方の歌に関する記事がある。

小大君は「三条院春宮之時女藏人左近」ともいわれ、三条院が春宮であられた時の女藏人であったと考えられるが、三条院の皇后であつた嬪子が実方のいとこにあたるところから、実方と小大君はかなり親しかったと思われ、小大君集には実方の名が多く出てくる。小大君集には

天上人、かつらよりふねにてわたるに、ほしのかけのみへければ、右衛門督きんたうのきみ

四〇 a みなそこにうつれるほしのかけみれは
さねかた

四〇 b あまのとわたる心地こそすれ

という公任と実方との短連歌も載せられている。小大君の歌の特色も後拾遺集の誹諧歌の中に

三条院の御時うへのとのみすてちかく侍りける人々まくらをおとしてまかり出でればかきつけて殿
上につかはしける
小大君

1215 道芝やおどろの髪にならされて移れる香こそくさ枕なれ

という一首がとられているなど、実方の歌と通いあうものがあり、実方と小大君はうまがあつたのであろう。

六

以上実方の伝記と歌の特色について述べてきたのであるが、伝記は小右記等の男性日記の記事も含めて実方の全生涯にわたるものがまたれるので今後はその方向で研究を進めたい。また特色についても今回は一面的なものである。このため全体的な特色の把握に努めたい。

注 (1) 「藤原実方について——平安の一貴族として」(和歌文学研究12号 昭36)

(2) 「中山歌仙三十六人伝」による。

(3) 山口博氏著「蔵人補任」による。

(4) 注3に同じ。

(5) 「公卿補任」による。

(6) 小学館刊「蜻蛉日記」による。

- (7) 「私家集大成・中古Ⅱ」所収本による。
- (8) 「中古歌仙三十六人伝」による。
- (9) 「公卿補任」による。
- (10) 「青山学院女子短期大学紀要・第三十一輯」所収「古今集の俳諧歌について」